２０２３年度
大学院奨励研究員研究報告書

2024年　３月　27日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	孫　之依　　印

指導教員

所属・職名	言語コミュニケーション文化研究科・教授
氏　　名	于　康　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	名詞修飾成分の誤用研究―中国語母語話者日本語学習者を対象に―
採用期間	２０２３年　４月　１日　～　２０２４　年　３月　３１日

研究科委員長・研究科長印	研究科受付印

提出先：　所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	孫之依	論文題目	学習者の誤用からみる「の」と「に」の選択条件―時間名詞を中心に―			
	雑誌名	言語コミュニケーション文化			巻号	発行年月	掲載頁
					21（１）	2024. 2	93－106

雑誌論文	著者名		論文題目				
	雑誌名				巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目		
	書名			発行年月	頁
					総頁：
					担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本語教育学会	開催地	オンライン
題目	中国語母語話者日本語学習者の誤用からみる「XのY」と「XY」の選択条件	発表年月日	2024年５月26日（採用済み、発表予定）

学会名	日本語文法学会	開催地	関西大学
題目	連体助詞「の」の過剰使用と脱落に関する一考察 ―固有名詞を中心に―	発表年月日	2023年12月２日

学会名	日本語誤用と日本語教育学会	開催地	中国・北京理工大学 およびオンライン
題目	連体助詞「の」と格助詞「に」の混用に関する一考察	発表年月日	2023年８月５日

研究経過状況（３０００字程度）

【本研究の概観】

中国語母語話者日本語学習者における連体助詞「の」に関する誤用がよく観察されている。例えば、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.11（以下、『YUK作文コーパス』と略して称す）には連体助詞「の」に関する誤用が6,244例観察される。本研究は、「の」に関する誤用を解明する一環として、典型的且つ主な誤用、言わば出現順位が高く見られる誤用の類型を対象に絞り、考察を行う。『YUK作文コーパス』において、最も顕著に観察される誤用の類型は、「の」の過剰使用と不使用、「の」と「な」の混用、「の」と「に」の混用の３つである。本研究は上述した３つの類型を中心に考察を行う。

これまでの「の」に関する誤用研究や、日本語研究、教科書における「の」の記述を概観した結果、３つの問題点が明らかとなった。１つ目は、「の」に関する誤用研究は主に日本語として成り立たない用例を対象としており、添削前後のいずれも日本語として成立可能な意味的な誤用に触れた研究はあるものの、それに触れていない誤用パターンも存在し、一般化されていない（問題点①）。２つ目は、「の」に関する選択条件については意味的な誤用を解明する前提とするが、その選択条件はこれまでの誤用研究のみならず、従来の日本語そのものの研究による指摘でも説明できないところがあり、更に解明する必要がある（問題点②）。３つ目は、中国の大学における日本語の教科書をみてみると、連体助詞「の」に関する説明は初級レベルにおいて所有や所属といった術語を用い、「XのY」の意味を列挙している。このような、「の」に関するデフォルト的な意味解釈を提示する点は学習者にとって役に立つと考えられる一方で、ただ意味を列挙しているだけであり、「の」の説明とまでは至っていないところがある（問題点③）。そこで、本研究は上述した問題点を踏まえ、以下の２点を研究目的とし、考察を行った。

Ⅰ　「の」の過剰使用と不使用、「の」と「な」の混用、「の」と「に」の混用における意味的な誤用を対象に、その選択条件を明らかにした上で、誤用メカニズムを解明する。

Ⅱ　Ⅰを踏まえ、連体助詞「の」に関する指導法を提案する。

Ⅰを用いて問題点①と②を解決し、Ⅱを用いて問題点③を解決する。上記のⅠとⅡを解明するための研究手法に関して、主に中国語母語話者日本語学習者を対象とする『YUK作文コーパス』における誤用データ及び日本語母語話者のデータベースにおける用例を用い、分析を行う。まず、学習者の誤用データにおける誤用現象を説明するために、日本語母語話者のデータベースを用い、日本語における「の」に関する選択条件を考察する。次に、学習者の用例が誤用と判断されたことから、日本語母語話者と学習者の捉え方の相違を考察した上で、誤用メカニズムを提示する。最後に、その選択条件と誤用メカニズムを踏まえ、指導法を提案する。

【博士論文の目次（予定）】

博士論文の構成は以下のとおりである。

第１章　序論
第２章　先行研究と本論文の研究基盤
第３章　「の」の過剰使用と不使用からみる選択条件と誤用メカニズム
第４章　「の」と「な」の混用からみる選択条件と誤用メカニズム
第５章　「の」と「に」の混用からみる選択条件と誤用メカニズム
第６章　終論―指導法の提案を兼ねて

以下に、各章の論文の内容を説明する。

第１章では、連体助詞「の」に関する先行研究を概観した上で、従来の先行研究に残されている課題を提示する。そして教科書における記述を踏まえ、日本語教育現場における「の」の指導法の提案の必要性を論じる。次に、先行研究における問題点を解決するため、本論文の研究目的を示した上で、本論文の研究手法を述べる。最後に、本論文で扱うデータ及び術語を説明した上で、本論文の構成を述べる。第２章では、連体助詞「の」を中心に、日本語研究及び誤用研究を挙げた上で、第１章で指摘した問題点があることを指摘する。そして、教科書の記述を踏まえ、誤用の視点から指導法の提案の必要性を論じる。さらに、上述した内容を踏まえ、研究目的との対応を説明する。第３章から第５章までは、「の」に関する誤用例を踏まえ、「の」に関する選択条件および誤用メカニズムについて考察を行う。各章の研究内容は以下のとおりである。第３章では、「の」の過剰使用と不使用を考察する。具体的に述べると、「XのY」と「XY」の両方が使用可能な「X（の）Y」を中心に、その選択条件を明らかにした上で、誤用メカニズムを解明する。第４章では、「の」と「な」の混用を考察する。具体的に述べると、「XのY」と「XなY」の両方が使用可能な用例を中心に、その選択条件を明らかにした上で、誤用メカニズムを解明する。第５章では、「の」と「に」の混用を考察する。具体的に述べると、「XのY」と「XにY」の両方が使用可能な用例を中心に、その選択条件を明らかにした上で、誤用メカニズムを解明する。第６章では、まとめとして、第３～５章までの連体助詞に関わる選択条件と誤用メカニズムの考察結果を踏まえ、誤用の視点から連体助詞「の」の指導法の提案を行う。最後に、本論文の結論を提示する。

【進捗状況】

現時点では博士論文の修正を行っている。研究目的ⅠとⅡで明らかにした内容及び奨励研究員の期間中の業績との対応は以下の通りである。

研究目的Ⅰに関しては、「の」の過剰使用と不使用、「の」と「な」の混用、「の」と「に」の混用に関する選択条件及びその誤用メカニズムは以下の内容が明らかになった。

「の」の過剰使用と不使用について、「XのY」と「XY」の相違は【関係づけ】【下位分類】の捉え方に関わる。また、学習者の誤用例に着目すれば、その選択条件はさらに具体化できる。誤用メカニズムについて、学習者は「XY」をひとかたまりとして使用するという捉え方や「の」の過剰般化に起因する可能性がある。

「の」と「な」の混用について、主に「X」を格の体系を持つものと持たないものに分け、【規定】【評価】などの術語を用い、選択条件を説明している。誤用メカニズムにおける、格の体系を持つものについて、学習者はそれを名詞として捉えた上で、「の」の過剰般化に起因する可能性がある。格の体系を持たないものについて、学習者は「X」が名詞を修飾する際、「Xの」あるいは「Xな」しか意識していないこと、また「Xの」と「Xな」の両方とも使用可能であることを意識しているが、その選択条件を理解していないため、誤用を生じさせる可能性がある。

「の」と「に」の混用について、その選択条件は「X」と「Y」の関係に焦点を当てているか、「X」と述語の関係に限定するかに関わる。誤用メカニズムについて、学習者は単に「X」と「Y」に着目し、「X」と述語の関係を意識していない可能性がある。

最後に、上述した選択条件及び誤用メカニズムを踏まえた指導法（研究目的Ⅱ）について述べる。「XのY」は「X」と「Y」の関係を表し、「XのY」と「XY」、「XのY」と「XなY」、「XのY」と「XにY」の指導に分け、提案を行っている。

2023月３月時点では、第１章と第２章は完成しており、第３章～第５章の一部の執筆もすでに完了した。そして、奨励研究員の期間（2023.４～2024.３）では、第３章～第５章の一部を書き下ろした上で、第６章を執筆している。この期間中に投稿した論文「連体助詞「の」と格助詞「に」の混用に関する一考察」は第５章、学会発表「中国語母語話者日本語学習者の誤用からみる「XのY」と「XY」の選択条件」「連体助詞「の」の過剰使用と脱落に関する一考察―固有名詞を中心に―」は第３章、「連体助詞「の」と格助詞「に」の混用に関する一考察」は第５章に関わる内容である。